

# 田子悲願 独自ニンニク

## 新品種「たっこ1号」登録



県産業技術センターの渋谷義仁理事長に「たっこ1号」の品種登録を報告した山本町長

## 19年以降 市場に

田子町はニンニクの新品種「たっこ1号」の登録に成功し17日、山本晴美町長が技術支援を受けた黒石市の県産業技術センターを訪れ農林水産省への品種登録（10月24日付）を報告した。ニンニクによるまちづくりを掲げる同町が悲願としてきたオリジナル品種の誕生に、山本町長は「町民の財産であるニンニク生産に弾みがつく」と語った。（本間善幸）

新品種は県産主力種「福地ホワイト六片種」や「白玉王」に比べて葉が幅広く、高品質な球の収穫を期待できるほか、球を構成するりん片が大きく数が多め、などの特徴がある。

厳密に管理された町内の隔離ほ場で育てたたっこ1号は、今秋に同町のニンニク農家250戸中、希望する95戸が2・7畝のほ場で植え付けた。18年夏、一定数の種球を確保できる。秋から本格生産に入り一般には19年以降に出回る。ニンニク生産量日本一の本県の中でも高品質で知られる同町は独自品種の獲得によ

て①他産地との差別化②生産規模の拡大―を目指す。1962（昭和37）年に始まった同町のニンニク生産は75年に生産額3億円を超え「日本一」を宣言するまでに成長した。最盛時の90年代前半、栽培面積は250畝を超したがその後、価格の安い中国産の流入や生産者の高齢化で現在は約130畝にまで減少した。

産地力の復活・強化へ同町は2010年、同センター野菜研究所（六戸町）に品種開発の協力を要請。町内の農家が古くから栽培してきた福地ホワイト系統の在来種300個を種球にして大きさ、形、病気の耐性に優れた種の選抜を繰り返した。野菜の品種改良は、種苗会社によるものが多く自治体主導での取り組みは珍しいという。

たっこ1号を栽培する同町の大規模農家「沢田ファーム」の沢田宏和さん（36）は「町や農家が丸となって日本一のニンニク産地からオリジナル品種を生み出す」と取り組んできた。差別化して販売できるだけに期待は高い」と話した。

平成29年11月18日東奥日報 掲載

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。